

ふやそうシジュウカラガン、へらそうカナダガン (日本語)

Branta canadensis

- 要注意外来種・カナダガン - 分布が広がる前に野外から取り除く

カナダガン

カナダガン (学名 *Branta canadensis*) は、北米大陸に生息する大型のガンの仲間です。野鳥や狩猟と異なしてイギリス、ヨーロッパ各地、ニュージーランドなどに持ち込まれました。1900年代に導入されたヨーロッパでは、現在16万羽に増加、野鳥と駆除が激しくつまずき、農業被害が大きな問題になっています。

日本では、飼育場林が溢れ出し、富士山麓の湖などで繁殖を始め、現在の約100羽が野生化し、要注意外来種に指定されています。草食性で、田んぼの稲穂を含むイネ科植物、他の雑草、マメ科のクズなども食べ、日本の環境にもたくましく適応しています。寿命は30年(飼育下)と長寿で、成鳥になると天敵はほとんどいません。

野生化の経緯

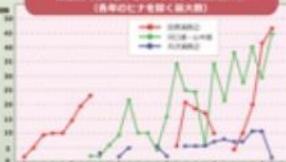
1985年に静岡県富士宮市で初めて2羽が観察され、その後富士山麓周辺で野生化し、現在は長野、東は茨城の範囲で観察され、絶滅危惧種・シジュウカラガンの越冬地、宮城でもその可能性がある鳥が観察されています。

カナダガンの分布の様子 (1985~2003)



○=観察回数年にわたり発生、△=1年以内の短期間発生

富士山周辺におけるカナダガンの観察数推移 (越冬のヒナを除く)



*2003年度は、2002年度に比べて観察数が増加した

今後危惧されること

- 農畜、ファン、生活被害の拡大
 畑への食害/キャンプサイトの芝生のファン害
- 生態系への影響
 近隣種と絶滅危惧種のシジュウカラガンとの交雑

問題解決のための対策

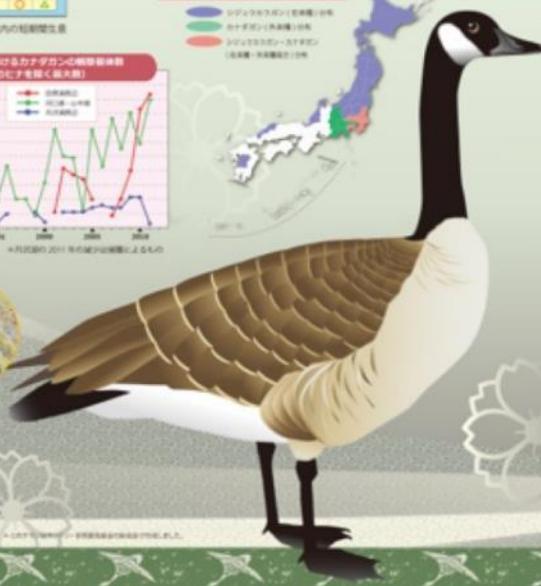
- カナダガンの生態調査でその実態を解明
 富士山麓を中心に約100羽が野生化し、繁殖/食害や生活被害の確認/今なら野外からの除去は可能
- 野外から除去する取り組み
 地元自治体による有害駆除隊編成に協力/神奈川、山梨、静岡の生態地で鳥の保護と駆除または駆除との交雑/種動物物産の協力を得て、野外から除去した鳥の一部を動物大使として展示飼育し、外来種問題の啓発活動を実施

課題

- 予防対策が困難
 御方法では、行政による被害予防以外の外来種対策が困難
- 継続活動が実現できる体制の確保
 民間団体主導では、長期活動が困難/駆除協力と継続したモニタリング体制の確保/駆除活動を完了できる体制と資金確保
- 新たな外来種化の予防
 池などで水を放しっぱなしの場合の管理義務の明確化/家畜も含めマイクロチップの装着と登録を義務化/外来種化が生み出す問題点についての啓発活動の徹底

シジュウカラガン・カナダガン分布

- シジュウカラガンの越冬地 (1985)
- カナダガンの越冬地 (2003)
- シジュウカラガン・カナダガンの交雑地 (1985~2003)



へらそう
加奈陀雁

Branta hutchinsii leucopareia

- 絶滅危惧種シジュウカラガン- 絶滅した群れを復元する

シジュウカラガン

シジュウカラガン (学名 *Branta hutchinsii leucopareia*) は、両種の白い顔、黒くて短めの首、西側の羽が特徴のガンの一種です。江戸時代の図説(雑文集)には、「十羽のうち、七、八羽がシジュウカラガン」と書いてあり、かつては日本に多数生息していましたが、今は絶滅危惧種になってしまいました。

シジュウカラガンの繁殖地は、北千島とアリューシャン列島の小島で、昔になると前者は日本へ、後者は北米の西海岸部へ渡っていました。1910-30年代に繁殖地の島々に毛皮目的でキツネが放され、その肉食となったシジュウカラガンは絶滅したと長らく考えられていました。1963年にアリューシャンの1つの小島に自然的に生き残っていた群れが発見され、米国政府は回復チームを作り、長年群れの回復に努めたため、米国へ渡る群れは絶滅の色種を脱しました。しかし日本(アゾラ)へ渡るシジュウカラガンはその後も絶滅した状態が続いていました。

シジュウカラガンとカナダガンの繁殖地



注) シジュウカラガンは、これまで外国で飼っているカナダガン *Branta canadensis* の4つのグループ(種)の1つと考えられてきましたが、最近、シジュウカラガンを含むこの4グループが別種 *Branta hutchinsii* に分類されました。



越冬のために日本に渡って来たシジュウカラガン

アジアのシジュウカラガン回復計画

1983年に「日本雁を保護する会」と「仙台市八木山動物公園」は、米国から繁殖地の種鳥を譲り受け、まず日本国内でシジュウカラガン回復計画に乗り出しました。1992年にはこの事業にロシア科学アカデミーのゲラシモフ博士のチームが加わり、日・米・露の三国共同プロジェクトとして本格化しました。

1992年の10月にロシア・カムチャツカにシジュウカラガンの増殖施設が完成し、そこで生まれた若鳥を、かつての繁殖地である北千島のエカルマ島にヘリコプターで運び、放しました。1995年から2010年の間に、約13羽、551羽を放鳥しました。2005年度から毎年約100羽の放鳥数が増加し、2011年度には248羽に達し、その数を毎年維持しては100羽を超えるシジュウカラガンの群れが観察されるようになりました。また数が増えただけでなく、同じ島が毎年増え、幼鳥を連れ戻された群れの数も増えました。これは1985年で放鳥した鳥が野生下で繁殖を始めたことを意味し、とても大きな成果と言えます。

長い時間がかりましたが、アゾラのシジュウカラガンの群れが、絶滅の色種を脱する目安となる1,000羽に達する日もそう遠くないと期待できるようになりました。



ふやそう
四十雀雁

資料: 日本雁を保護する会、仙台市八木山動物公園、シジュウカラガン回復計画、シジュウカラガンの越冬地、シジュウカラガンの繁殖地、シジュウカラガンの放鳥数、シジュウカラガンの観察数、シジュウカラガンの分布、シジュウカラガンの生態、シジュウカラガンの駆除、シジュウカラガンの保護、シジュウカラガンの研究、シジュウカラガンの学名、シジュウカラガンの分類、シジュウカラガンの進化、シジュウカラガンの地理、シジュウカラガンの歴史、シジュウカラガンの文化、シジュウカラガンの芸術、シジュウカラガンの文学、シジュウカラガンの音楽、シジュウカラガンの映画、シジュウカラガンのテレビ、シジュウカラガンのラジオ、シジュウカラガンのインターネット、シジュウカラガンの書籍、シジュウカラガンの雑誌、シジュウカラガンの新聞、シジュウカラガンの漫画、シジュウカラガンのゲーム、シジュウカラガンのおもちゃ、シジュウカラガンの食料、シジュウカラガンの飼育、シジュウカラガンの展示、シジュウカラガンの販売、シジュウカラガンの輸入、シジュウカラガンの輸出、シジュウカラガンの貿易、シジュウカラガンの観光、シジュウカラガンの教育、シジュウカラガンの研究、シジュウカラガンの開発、シジュウカラガンの応用、シジュウカラガンの産業、シジュウカラガンの社会、シジュウカラガンの環境、シジュウカラガンの生態系、シジュウカラガンの生物多様性、シジュウカラガンの持続可能性、シジュウカラガンの未来、シジュウカラガンの希望、シジュウカラガンの夢、シジュウカラガンの理想、シジュウカラガンの現実、シジュウカラガンの未来、シジュウカラガンの希望、シジュウカラガンの夢、シジュウカラガンの理想、シジュウカラガンの現実

ラムサール条約第11回締約国会議 ブース展示 (2012年10月,ブカレスト、ルーマニア)

